

| | | | |
|---|-----|-------|--|
| ① 申請者 | 行田市 | ② タイプ | 地域型 / シリアル型 A B C D <input checked="" type="checkbox"/> E |
| ③ タイトル | | | |
| 和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち ^{ぎょうだ} 行田 | | | |
| ④ ストーリーの概要(200字程度) | | | |
| <p>^{おしじょう}忍城の城下町行田の裏通りを歩くと、時折ミシンの音が響き、土蔵、石蔵、モルタル蔵など多彩な足袋の倉庫「足袋蔵」が姿を現す。行田足袋の始まりは約300年前。武士の妻たちの内職であった行田足袋は、やがて名産品として広く知れ渡り、最盛期には全国の約8割の足袋を生産するまでに発展した。それと共に明治時代後半から足袋蔵が次々と建てられていった。今も日本一の足袋産地として和装文化の足元を支え続ける行田には、多くの足袋蔵等歴史的建築物が残り、趣きある景観を形づくっている。</p> | | | |
|  | | | |
|  | | | |

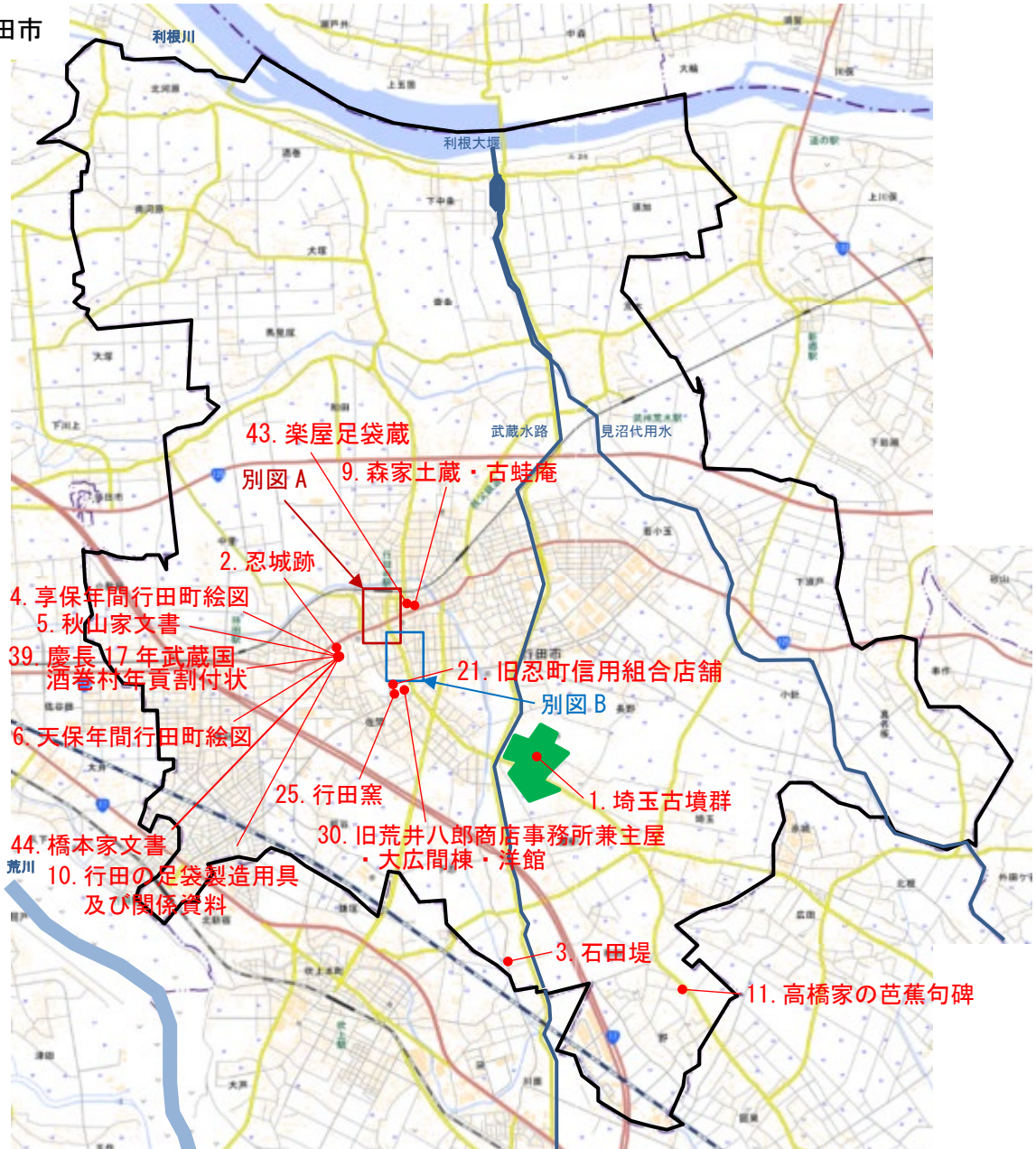
市町村の位置図 (地図等)

埼玉県



構成文化財の位置図 (地図等)

行田市



※この地図は国土地理院地図を加工して使用

構成文化財の位置図 (地図等)

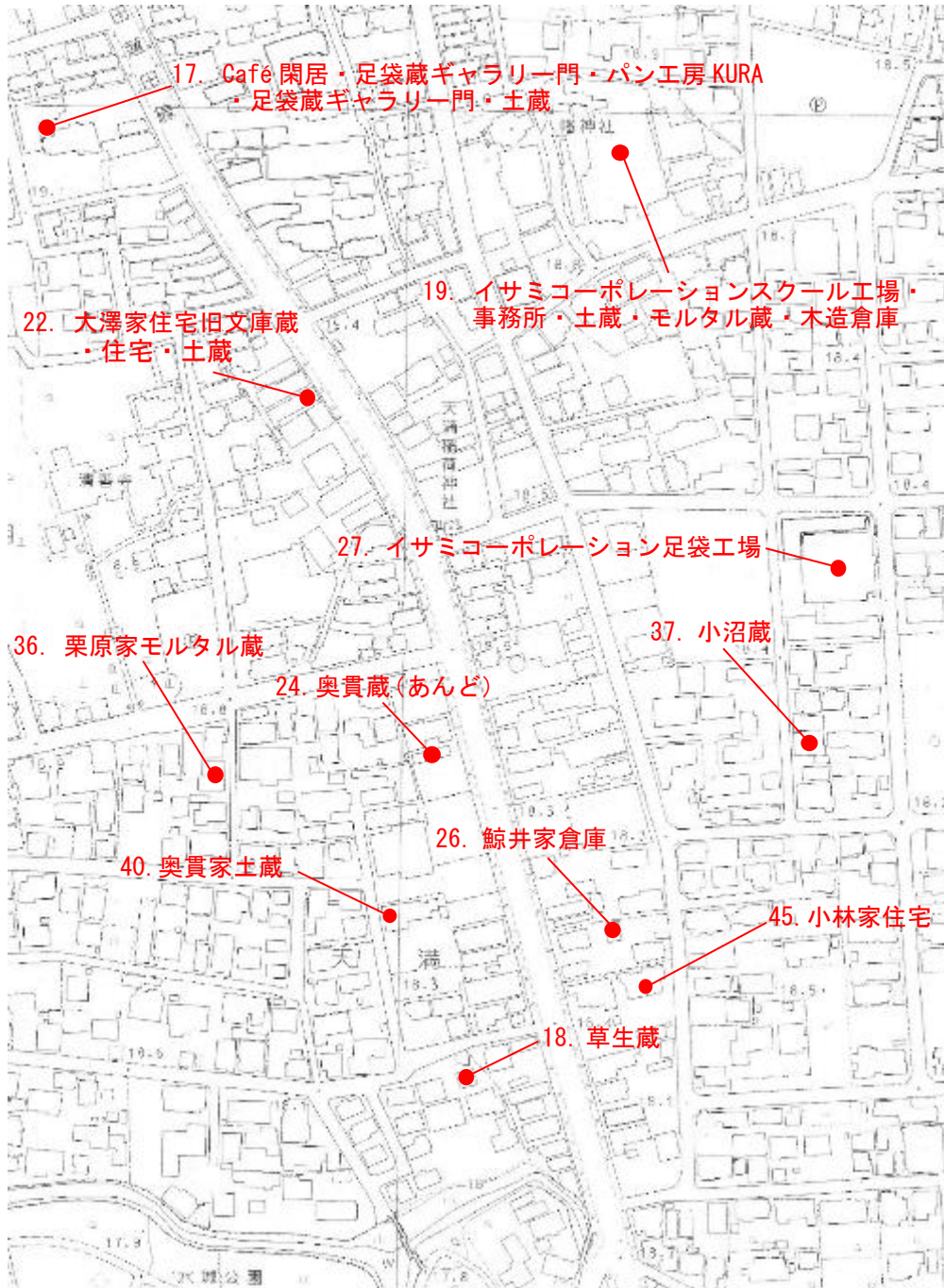
別図 A



※この地図は行田市都市計画図を使用

構成文化財の位置図 (地図等)

別図B



※この地図は行田市都市計画図を使用

ストーリー

関東平野の中央部に位置する行田市は、日本一の足袋生産地として知られ、足袋産業全盛期を偲ばせる足袋の倉庫「足袋蔵」が今も数多く残る“足袋蔵のまち”です。表通りに土蔵造りの見世蔵が建ち並ぶ“蔵のまち”は各地にあります。行田はそうした“蔵のまち”とは異なり、足袋蔵のほとんどが裏通りに建てられています。蔵の造りも土蔵造りだけでなく、石造、煉瓦造、モルタル造、鉄筋コンクリート造、木造と多彩です。いつどのようにして「足袋蔵の町並み」が形成されたのでしょうか。

足袋づくりの始まり

利根川、荒川の二大河川に挟まれた行田市周辺地域では、両河川の氾濫で堆積した砂質土、豊富な水、夏季の高温が綿や藍の栽培に適していたことから、近世になると藍染の綿布生産が盛んになり、これを原料に行田のまちで培われた縫製技術を活かして、足袋づくりが始まりました。

行田足袋については、「貞享年間じょうきやう亀屋某なる者専門に営業を創めたのに起こり」との伝承があり、享保年間きやうほう(1716~1735)頃の「行田町絵図」に3軒の足袋屋が記されていることから、18世紀前半には生産が始まっていたと思われます。享保年間に忍藩主が藩士の婦女子に足袋づくりを奨励したとの伝説があるように、その後足袋づくりは盛んになり、明和2年(1765)の「東海木曾両道中懐宝図鑑」に「忍のさし足袋名産なり」と記されるまでに、広く知られるようになりました。足袋には株仲間がなく、取引が比較的自由に行えたことから、足袋づくりは益々盛んになり、天保年間(1830~1844)頃には27軒もの足袋屋が、行田のまちに軒を連ねるようになりました。



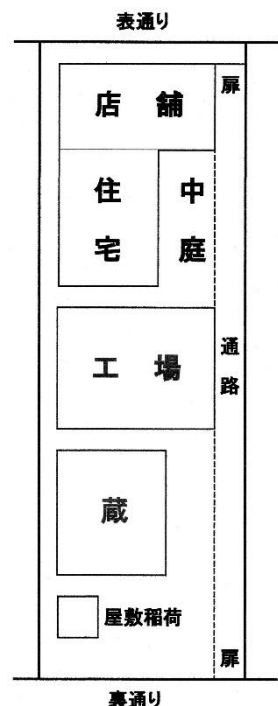
さし足袋 (刺し子の足袋)

足袋産業の発展と足袋蔵の建設

近代に入ると足袋は大衆化して需要が拡大し、行田の足袋商人は東北地方や北海道に直接赴いてさらに販路を広げると共に、軍需用の足袋の生産にも携わり、他の産地を圧倒してゆきます。足袋づくりには作業工程ごとに専用の特種マシンが導入され、日露戦争の好景気を契機に足袋工場建設ブームが起こって、敷地の裏庭に工場が建てられてゆきます。生産量が増えると、出荷が本格化する秋口まで製品を保管して置く倉庫として足袋蔵が必要になり、既存の土蔵の転用と共に、敷地の一番奥に足袋蔵が数多く建てられるようになりました。

石田三成の水攻めに耐えた忍城の城下町であった行田は、近世前半に城と城下町の整備が行われ、間口の広さに応じて各家に税が課せられたので、間口が狭く奥行きが長い短冊型の敷地が通り沿いに並ぶ町割りが形成されました。近世の行田は、鴻巣・吹上から館林へと続く館林道・日光脇往還の宿場でもあったので、馬の世話を行なう裏庭とそこに通じる路地が家々の間に設けられていましたが、近代になって馬の世話の必要がなくなり、遊休化した裏庭に足袋工場と足袋蔵が建てられていったのです。

こうして短冊形の敷地に、北風に備えて北西方向のみを塗り壁にしたり、北西方向の窓を極端に少なくしたりと言った防火・防寒対策を施した店舗・住宅、接客用の中庭、工場、足袋蔵、火除けを願う屋敷稲荷が表から列状に並ぶ、足袋商店特有の建物配置が形作られました。



足袋商店の建物配置



洋風建築技術が導入された大型の土蔵



戦後の石蔵

行田の足袋蔵は、遅くとも江戸時代後期頃には建てられ始めていたようで、弘化3年(1846)の大火の際に足袋蔵が延焼を食い止めています。足袋蔵は商品や原料を扱いやすいよう壁面に多くの柱を建てて中央の柱を少なくし、床を高くして床下の通気性を高めるなど、内部の造りに特徴があります。足袋蔵の建設が本格化する明治30年代頃までは、純和風の土蔵が建てられていましたが、明治時代末頃からは土蔵の小屋組みに洋風建築技術が導入され、土蔵だけでなく石蔵も建てられるようになりました。大正時代に入ると大型の足袋蔵も建てられるようになり、大正時代末には鉄骨煉瓦造の足袋蔵が現われました。昭和に入ると鉄筋コンクリート造、モルタル造、木造の足袋蔵も現われ、大小様々な多種多様の足袋蔵が昭和戦前期には建てられました。戦後は木材不足から石蔵が主流となり、昭和30年代前半まで足袋蔵の建設は続けられました。

行田の足袋蔵が他の“蔵のまち”と違って多種多様であるのは、このように100年以上もの永きに渡って、新しい建築様式を取り入れながら足袋蔵が建てられ続けたからなのです。そしてその背景には、生産量が増加しても企業統合等による大企業化には進まず、逆にのれん分けして次第に足袋商店と足袋蔵が増加、ピーク時には200社以上の中・小規模の足袋商店が共存して一大産地を形成していた、行田の足袋産業ならではの特色があったのです。

日本一の足袋のまち

東北・北海道に販路を伸ばした行田の足袋商店は、「力弥足袋商店」なら八戸、「道風足袋商店」なら尾去沢鉾山といったように、問屋を通さずに各々が地域単位で独占的な販売網を築き、協調しながら販路をやがて全国そして海外へと広げて行きました。この頃の行田の人々は、老若男女を問わず皆が寝食を惜しんで工場や家庭で足袋づくりに励み、まち全体にミシンの音が響き渡っていました。寸暇を惜しんで働く女工さんの間で、手軽に食べられるおやつとしてお好み焼きに似た「フライ」、おからのコロッケとも言える「ゼリーフライ」が流行し、地域の食文化として定着しました。

また、販売先への手土産として奈良漬が好まれ、行田の名物となりました。

こうして最盛期の昭和13～14年には、全国の約8割の足袋を生産する日本一の産地となり、『行田音頭』の歌詞に「足袋の行田を思い出す」とあるように、「足袋の行田か行田の足袋か」と謳われる“日本一の足袋のまち”になったのです。



ゼリーフライ(左)とフライ(右)

継承され発展する足袋蔵のまち

靴下が普及した現在も、行田では足袋の生産が続けられており、日本一の産地として新製品を国内外へと発信し続け、「足袋と言えば行田」と多くの方に親しまれています。

足袋産業で繁栄していたことを象徴する多種多様な足袋蔵も約80棟が現存し、時折流れるミシンの音と共に、裏通りに趣きのある足袋蔵のまち並みを形成しています。そしてその再活用が、まちに新たな彩りを加え始めています。

ストーリーの構成文化財一覧表

| 番号 | 文化財の名称 | 指定等の状況 | ストーリーの中の位置づけ | 文化財の所在地 |
|----|--|---------------------|---|---------|
| 1 | さきたまこふんぐん 埼玉 古墳群 | 国特別史跡 | 東日本最大規模の古墳群。忍城水攻めの際には、石田三成率いる豊臣秀吉軍の本陣が丸墓山古墳墳頂に置かれた。 | |
| 2 | おしじょうあと 忍 城跡 | 県旧跡 *旧跡は史跡に準ずるもの | 城下町行田の発展の基礎となった城。沼地と河川を巧みに利用して築かれ、石田三成の水攻めにも耐え「浮城」、「水城」とも呼ばれた。現在、本丸跡には行田市郷土博物館が開設され、足袋関連資料も展示されている。 | |
| 3 | いしだづつみ 石田堤 | 県史跡 | 石田三成率いる豊臣秀吉軍が忍城を水攻めするために自然堤防上に築いた堤。 | |
| 4 | きょうほうねんかんぎょうだまち え ず 享保 年間 行田町 絵図 | 未指定 | 享保年間(1716～1735)頃の行田町の絵図。3軒の足袋屋が記載されており、この時期に既に行田で足袋づくりが始まっていたことが伺える。 | |
| 5 | あきやまけもんじよ 秋 山家 文書 | 未指定 | 行田町有数の老舗足袋商であった秋山家に伝来した文書群。江戸時代後期の足袋製造や経営を知るうえで貴重な資料である。 | |
| 6 | てんぼうねんかんぎょうだまち え ず 天保 年間 行田町 絵図 | 未指定 | 天保年間(1830～1844)頃の行田町の絵図。27軒の足袋屋が記載されており、当時の行田町で足袋屋が他のどの業種よりも件数が多くなっている状況がわかる絵図である。 | |
| 7 | おおさわきゆう う えもん け じゅうたく 大澤 久 右衛門家 住宅 ・土蔵 | 未指定 | 江戸時代の行田町最大の豪商であった藍染の綿布問屋の江戸時代後期建設と思われる住宅と土蔵。土蔵は現存する最古の足袋蔵で、弘化3年(1846)の大火の際には、この2棟が延焼を食い止めた。 | |
| 8 | ほつうままつ 初午 祭り | 未指定 | 弘化3年(1846)の大火を契機に行田町周辺で始まった火除けの祭礼。足袋蔵の脇にある屋敷稲荷で執り行われており、足袋蔵と共に行田の裏通りの景観を形づくる風物詩となっている。 | |
| 9 | もりけどぞう こ あん 森家 土蔵 ・ 古蛙 庵 | 未指定 | 嘉永3年(1850)と明治45年(1912)棟上の2棟の土蔵造りの足袋蔵。前者は既存の土蔵を明治時代に足袋蔵に転用したもので、現在は私的な民芸館「古蛙庵」として活用されている。 | |

| | | | |
|-----|--|---------|--|
| 1 0 | 行田の足袋製造用具 及び 関係資料 | 国重要有形民俗 | 行田市郷土博物館所蔵の行田足袋の製造が手縫いから機械化へ変化していく変遷を示す貴重な資料 5484 点。 |
| 1 1 | 高橋家の芭蕉句碑 | 市史跡 | 「名月の花かと見えて綿ばたけ」の句を刻んだ芭蕉句碑。碑が建立された明治 9 年(1866)頃には、この地域で足袋の布地の原料となる綿の生産が盛んであったことがわかる。 |
| 1 2 | 十方石 ふくさや行田 本店 店舗 | 国登録建造物 | 明治 16 年(1883)棟上の元山田呉服店の重厚かつ豪勢な店蔵。後に足袋蔵に転用され、現在は埼玉県を代表する和菓子店の店舗となっている。 |
| 1 3 | 牧野本店店蔵・主屋・ 土蔵・足袋とくらしの 博物館 | 未指定 | 大正 13 年(1924)棟上の豪勢な店蔵・主屋、明治 32 年(1899)棟上と建築年代不明の 2 棟の土蔵造りの足袋蔵、大正 11 年(1922)棟上の足袋工場が残る元足袋商店の建物群、現在工場はNPO運営の博物館となっている。全盛期の足袋商店の様相を現す建物群である。 |
| 1 4 | 時田家住宅・時田蔵 | 未指定 | 元時田啓左衛門商店の昭和 15～16 年頃建設の和洋折衷住宅、明治 36 年(1903)竣工と大正初期頃建設の 2 棟の土蔵造りの足袋蔵。足袋蔵は、行田市内では珍しい袖蔵形式である。 |
| 1 5 | 保泉蔵 | 未指定 | 元行田随一の足袋原料商店の昭和元年(1926)建設の石造の店蔵・主屋、明治後期と大正 5 年(1916)建設の土蔵、昭和 7 年(1932)棟上の石蔵、昭和戦前期建設のモルタル蔵。敷地東側に店蔵・主屋・足袋蔵 3 棟が一行に並び蔵並みは圧巻で、時代による足袋蔵の変遷も理解できる。 |
| 1 6 | 足袋蔵 まちづくりミュー ージアム (栗代蔵) | 未指定 | 明治 39 年(1906)建設の元栗原代八商店の土蔵造りの足袋蔵。現在はNPO運営の観光案内所兼まちづくり情報センターとなっている。 |
| 1 7 | Cafe閑居・足袋蔵 ギャラ リー門・パン工房 KURA・ クチキ建築設計事務所 ・ 土蔵 | 未指定 | 元奥貫忠吉商店の昭和 5 年(1930)棟上の住宅、明治 43 年(1910)棟上・大正 5 年(1916)棟上の洋小屋の土蔵 3 棟と建築年代不明の土蔵(いずれも足袋蔵)。足袋蔵の 1 棟は市内唯一の 3 階建ての蔵である。住宅と足袋蔵 3 棟が様々な形で再活用されている。 |
| 1 8 | 草生蔵 | 未指定 | 昭和 30 年(1955)竣工と思われる元金楽足袋株式会社の石造の足袋蔵。胴差部に稲田石が用いられている。最末期の石造の足袋蔵の代表例である。 |

| | | | |
|----|---|----------------|--|
| 19 | イサミコーポレーション スクール工場・事務所 ・土蔵・モルタル蔵・ 木造倉庫 | 未指定 | イサミコーポレーションの大正6年(1917)建設のノコギリ屋根の旧足袋工場、翌年建設の事務所、大正～昭和初期頃建設の工場(当初は講堂・寄宿舎・食堂)、土蔵(足袋蔵)、木造倉庫(足袋蔵)、昭和13年(1938)棟上のモルタル蔵(足袋蔵)。初期の大規模足袋工場の姿を伝える建物群。 |
| 20 | たしろぐら 田代蔵 | 未指定 | 元田代鐘助商店の大正時代建設の住居と土蔵(足袋蔵)、昭和2年(1927)建設の店舗・主屋と土蔵(足袋蔵)の4棟が、短冊形の敷地に一列に並んで建てられている。 |
| 21 | きゅうおしましんようぐみあいてんぽ 旧忍町信用組合店舗 | 市指定建造物 | 大正11年(1922)建設の木造洋風銀行店舗。足袋商店主たちが出資して創業した地元金融機関の創業時の店舗で、足袋産業の発展を支えた。 |
| 22 | おおさわけじゅうたくきゅうぶんこぐら 大澤家住宅 旧文庫蔵・ 住宅・土蔵 | 国登録建造物 ・未指定 | 行田の足袋産業発展に尽力した大澤商店の7代大澤専蔵が大正15年(1926)に竣工させた行田市唯一のレンガ造の足袋蔵、同じく昭和3年(1928)に竣工させた店舗併用住宅。明治末頃建設と伝えられる土蔵造りの足袋蔵。 |
| 23 | きゅうおがわちゅうじろうしょうてんぽ 旧小川忠次郎商店店 舗及び主屋 | 国登録建造物 | 足袋原料を扱った小川忠次郎商店が大正14年(1925)に棟上した土蔵造りの店舗併用住宅。現在はNPO運営の蕎麦店となっている。 |
| 24 | おくぬきぐら 奥貫蔵(あんど) | 未指定 | 奥貫忠吉商店が大正～昭和初期に建設した大型の土蔵造りの足袋蔵。現在は蕎麦店として再活用されている。 |
| 25 | きょうだがま 行田窯 | 未指定 | 荒井八郎商店が昭和初期頃に建設した元足袋原料倉庫。曳家され、約1/3の大きさになって陶芸窯として再活用されている。現存する数少ない木造の足袋蔵として貴重である。 |
| 26 | くじらいけそうこ 鯨井家倉庫 | 未指定 | 昭和3年(1928)に建設された鉄筋コンクリート造の元足袋原料倉庫(足袋蔵)。現存する行田市唯一の戦前の鉄筋コンクリート造の足袋蔵である。 |
| 27 | イサミコーポレーション たびこうじょう 足袋工場 | 未指定 | 昭和初期の建設と思われるノコギリ屋根の木造洋風足袋工場と元食堂。足袋生産の拡大で、大規模工場が郊外に建てられていった昭和初期の行田を代表する足袋工場である。 |
| 28 | ときたたびぐら 時田足袋蔵 | 未指定 | 元時田啓左衛門商店の昭和4年(1929)棟上の大型の土蔵造りの足袋蔵。足袋産業の発展とともに足袋蔵が大型化していったことがわかる。 |
| 29 | むさしのぎんこうぎょうだしてん 武蔵野銀行行田支店 店舗 | 国登録建造物 | 足袋産業の資金面を支えた忍貯金銀行が昭和9年(1934)に竣工させた本格的銀行建築の店舗。戦後は足袋会館(足袋組合事務所)となり、現在は武蔵野銀行店舗である。 |

| | | | |
|----|---|--------|---|
| 30 | <small>きゅうあらい はちろう しょうてん</small> 旧荒井 八郎 商店 <small>じむしょけんしゅや おおひろま</small> 事務所兼主屋・大広間 <small>とう ようかん</small> 棟・洋館 | 国登録建造物 | 行田足袋被服工業組合の理事長を務めた荒井八郎が昭和12年(1937)に棟上した事務所兼主屋等3棟。「足袋御殿」とも呼ばれ、地域の迎賓館としての役割も果たした。現在は和牛懐石「彩々亭」の店舗となっている。 |
| 31 | <small>あいぞめ たいけん こうぼう まき</small> 藍染体験工房「牧 <small>ていしゃ</small> 禎舎」 | 未指定 | 昭和15年(1940)竣工の元牧禎商店の事務所兼住宅と足袋被服工場。現在はNPO運営のアーティストシェア工房&藍染体験施設となっている。 |
| 32 | フライ | 未指定 | 小麦粉を溶いてねぎを入れ、薄く延ばして焼き上げたお好み焼きに似た郷土料理。足袋工場に勤める女工さんのおやつとして普及した。 |
| 33 | ゼリーフライ | 未指定 | おからとジャガイモを混ぜて揚げたコロッケに似た郷土料理。足袋工場に勤める人々に、おやつとして愛されている。 |
| 34 | <small>ぎょうだ ならづけ</small> 行田の奈良漬 | 未指定 | 足袋商店が得意先への贈答品として愛用している行田の奈良漬。足袋産業全盛期には、足袋商店の店先に漬物樽が持ち込まれ、そこで漬けて持ち出されていた。 |
| 35 | <small>こうしぐら</small> 孝子蔵 | 未指定 | 大木末吉商店が昭和26年(1951)に棟上した石造の足袋蔵。木材不足から極力木材を使わずに建設されている。戦後の行田を代表する足袋蔵である。 |
| 36 | <small>くりはらけ</small> 栗原家 <small>ぐら</small> モルタル蔵 | 未指定 | 昭和28年(1953)に館林市の農家の米蔵を移築した元福力足袋有限会社のモルタル造の足袋蔵。数少ない戦後の移築転用された足袋蔵である。 |
| 37 | <small>こぬまぐら</small> 小沼蔵 | 未指定 | 昭和29年(1954)建設の元豊年足袋本舗の大谷石造の足袋蔵。戦後の行田の足袋蔵の代表例である。 |
| 38 | <small>ぎょうだたび</small> 行田足袋 | 未指定 | 行田に本社を置く足袋商店が製造する足袋。地域ブランドとして多方面に発信している。 |
| 39 | <small>けいちょう むさしのくにさかまき</small> 慶長17年武蔵国酒巻 <small>むらねんぐわりつけじょう</small> 村年貢割付状 | 未指定 | 慶長17年(1612)の酒巻村の年貢割付状。畑の年貢として木綿が書き上げられ、江戸時代初期にすでに行田市域で木綿が栽培されていたことがわかる。 |
| 40 | <small>おくぬきけどぞう</small> 奥貫家土蔵 | 未指定 | 大正時代の建設と伝えられる元奥貫忠吉商店の土蔵造りの足袋蔵。同商店は市内数か所に足袋蔵を建設しており、この蔵もそのひとつである。 |
| 41 | <small>かさはらけじゅうたく</small> 笠原家住宅 | 未指定 | 昭和6年(1931)建設と伝えられる元足袋原料商店の店舗併用住宅。その後足袋卸売商の店舗併用住宅、旅館、バーと用途が変わり、現在は住宅となっている。昭和戦前期の姿を良く留めている。 |
| 42 | <small>ぎょうだおんど</small> 行田音頭 | 未指定 | 行田の足袋産業が不景気にあえいだ昭和9年(1934)に、当時の忍町長の発案で不景気を吹き飛ばそうと西條八十、中山晋平に依頼して制作した音頭。「足 |

| | | | | |
|-----|----------------------|-----|--|--|
| | | | 袋の行田を思い出す」等、歌詞にも足袋のことが歌われている。 | |
| 4 3 | がくやたびぐら 楽屋 足袋蔵 | 未指定 | 昭和 20 年代後半の建設と伝えられる楽屋足袋の石造の足袋蔵。戦後の行田を代表する足袋蔵のひとつである。 | |
| 4 4 | はしもとけもんじよ 橋本家 文書 | 未指定 | 行田有数の足袋商店であった橋本喜助商店の足袋に関わる江戸時代後期～昭和戦前期の文書群。 | |
| 4 5 | こばやしけじゅうたく 小林家 住宅 | 未指定 | 昭和 16 年(1941)建設と伝えられる足袋原料問屋の隠居住宅。行田の足袋商店はしばしば別宅を持っていたが、この隠居住宅は、和風建築と洋風建築が複合された珍しい建築となっている。 | |

構成文化財予定の写真一覧

① 埼玉古墳群



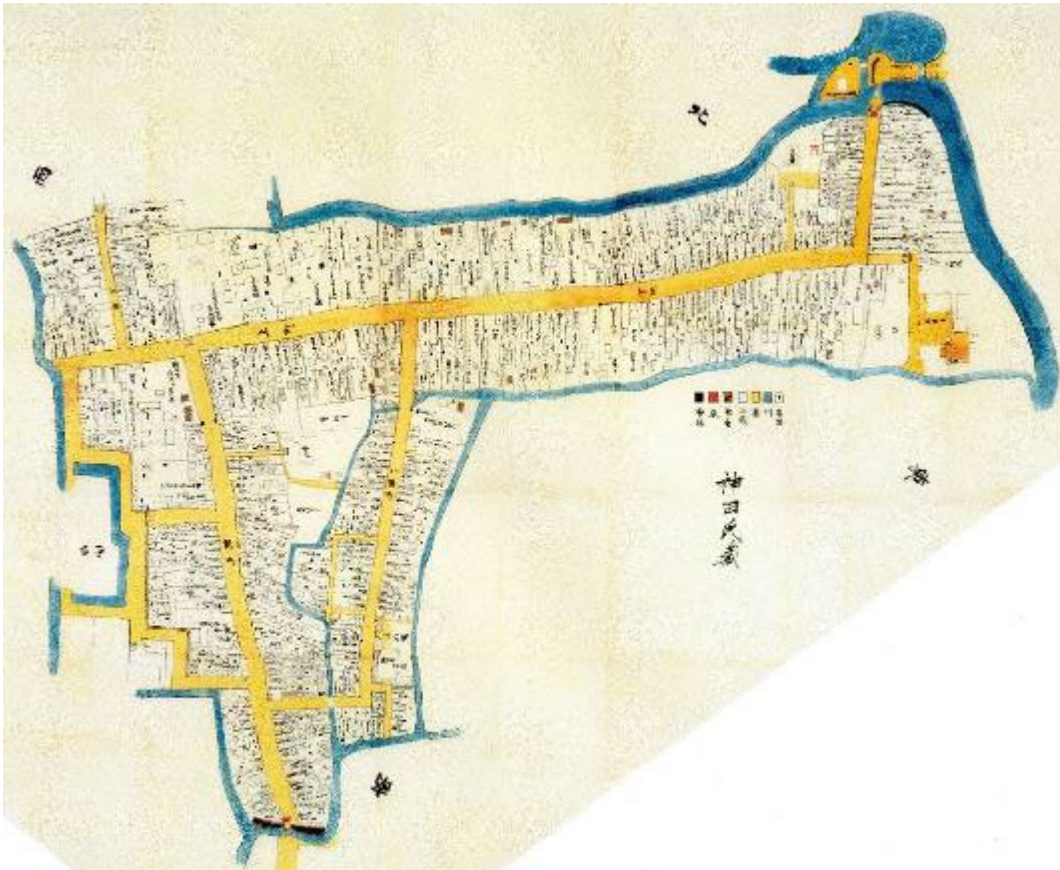
② 忍城跡



③ 石田堤

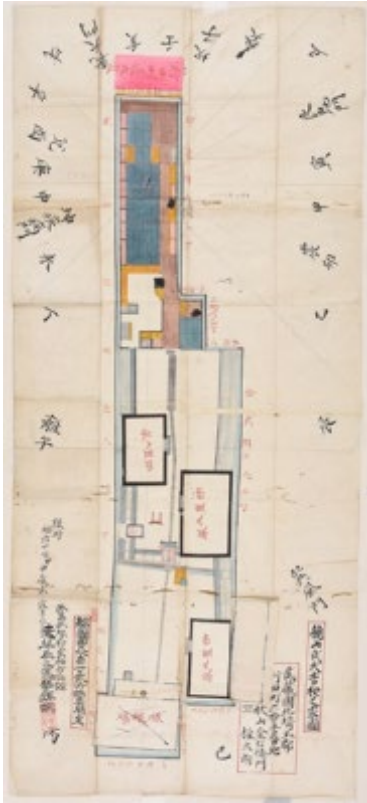


④ 享保年間行田町絵図



構成文化財予定の写真一覧

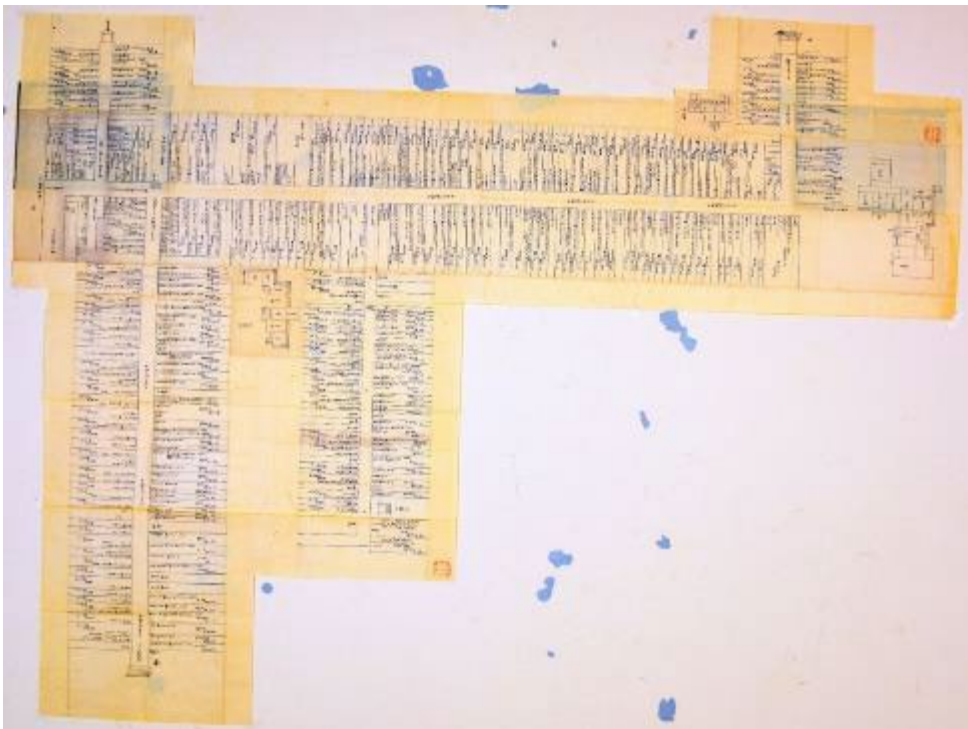
⑤ 秋山家文書



⑦ 大澤久右衛門家住宅・土蔵



⑥ 天保年間行田町絵図



構成文化財予定の写真一覧

⑧ 初午祭り



⑩ 行田の足袋製造用具及び関係資料



⑨ 森家土蔵・古蛙庵



⑪ 高橋家の芭蕉句碑



⑫ 十万石ふくさや行田本店店舗



構成文化財予定の写真一覧

⑬ 牧野本店店蔵・主屋・土蔵・足袋とくらしの博物館



⑯ 足袋蔵まちづくりミュージアム(栗代蔵)



⑭ 時田家住宅・時田蔵



⑰ Café 閑居・足袋蔵ギャラリー門・パン工房 KURA・クチキ建築設計事務所・土蔵



⑮ 保泉蔵



⑱ 草生蔵



構成文化財予定の写真一覧

⑱ イサミコーポレーションスクール工場・
事務所・土蔵・モルタル蔵・木造倉庫



⑳ 大澤家住宅旧文庫蔵・住宅・土蔵



㉑ 田代蔵



㉒ 旧小川忠次郎商店店舗及び主屋



㉓ 旧忍町信用組合店舗



㉔ 奥貫蔵 (あんど)



構成文化財予定の写真一覧

⑫ 行田窯



⑬ 時田足袋蔵



⑭ 鯨井家倉庫



⑮ 武蔵野銀行行田支店店舗



⑯ イサミコーポレーション足袋工場



⑰ 旧荒井八郎商店事務所兼主屋・大広間棟・洋館



構成文化財予定の写真一覧

⑳ 藍染体験工房「牧禎舎」



㉑ 行田の奈良漬



㉒ フライ



㉓ 孝子蔵



㉔ ゼリーフライ



㉕ 栗原家モルタル蔵



構成文化財予定の写真一覧

⑳ 小沼蔵



㉑ 奥貫家土蔵



㉒ 行田足袋



㉓ 笠原家住宅



㉔ 慶長 17 年武蔵国酒卷村年貢割付状



㉕ 行田音頭



構成文化財予定の写真一覧

④楽屋足袋蔵



④橋本家文書



④小林家住宅



日本遺産を通じた地域活性化計画

| 認定番号 | 日本遺産のタイトル |
|--------|-----------------------|
| No. 41 | 和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田 |

(1) 将来像 (ビジョン)

本市の日本遺産のブランド力向上を図ると共に、地域活性化と持続可能なまちづくりを目指して、つぎの2つの視点からビジョンを設定する。

① 来訪者・民間事業者視点のビジョン

「行田の足袋産業繁栄に関連する歴史・文化・自然を五感で体感できる」をコンセプトとして掲げ、足袋蔵等の構成文化財の更なる利活用を民間事業者を中心に促進するとともに、構成文化財を効率良く楽しく回遊する魅力あるモデルルートの構築を図る。

現在、構成文化財はカフェ、蕎麦屋、博物館等に利活用されているが、今後は、構成文化財の所有者と利活用希望者のマッチングを図り、更なる有効活用を促していく。

また、郷土博物館(市)、さきたま史跡の博物館(県)、足袋とくらしの博物館(NPO)で本市の歴史や足袋について展示物や映像で学べるが、3館が連携して来訪者の回遊を促進するとともに、構成文化財の説明板でも映像説明などで、日本の和装足袋文化を含めて行田足袋について知ることができる取組を進める。併せて、説明板、パンフレット、現地ガイド等の多言語対応を推進し、インバウンドを含めた情報発信を行う。

そして、来訪者が構成文化財を、見る、知る、体験する、食べる ことを通して楽しく回遊し、「また来たい」と思っていただけのリピーターを増やしていく。

② 市民視点のビジョン

「足袋と足袋蔵のまち行田を、誇りを持って発展させていく」をコンセプトとして掲げ、子どもから大人まで、市民の郷土愛・シビックプライドの醸成と将来のストーリーテラー等担い手の育成を図り、日本遺産のまちとしての持続可能性を高めていく。

子どもについては、小中学校で足袋の学習やマイ足袋づくり、学校給食でのゼリーフライ(文化庁100年フード認定)の提供、足袋の原料の綿花栽培などに取り組む。

大人については、日本遺産に関するシンポジウムの開催や日本遺産講座の開講、地域要望による出前講座などに取り組む。

これらに継続して取り組むことで、市民がまちに誇りと愛着を持ち、観光地としてのホスピタリティと文化財の保存・活用に対する意識の向上に繋げていく。

これら2つのビジョンに基づいた各種事業に取り組むことで、来訪者には足袋文化の体感を通じて行田ファンになってもらい交流人口の増加に繋げていく。また、市民には足袋や足袋蔵等の先人から受け継いだ「まちの財産を守り文化を育む」ことに誇りを持ってもらう。そして、「活力と希望に満ちた足袋と足袋蔵のまち行田」を実現していく。

以上の将来像(ビジョン)は第6次行田市総合振興計画における基本目標2-政策4-政策分野2「歴史や文化を生かしたまちづくり」、基本目標5-政策1-政策分野1「観光まちづくりの推進」に位置付けられており、日本遺産を通じた地域活性化が総合振興計画の実現に寄与するものである。

(2) 地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①－A：忍城・足袋蔵エリア及び埼玉古墳群エリア来訪者数

| 年度 | 実績 | | | 目標 | | |
|---------------------|---|----------|----------|----------|----------|----------|
| | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
| 数値 | 153,529人 | 532,615人 | 555,173人 | 572,000人 | 589,000人 | 607,000人 |
| 指標・目標値の設定の考え方及び把握方法 | <ul style="list-style-type: none">・ ストーリーを構成する代表的な構成文化財（埼玉古墳群、忍城、足袋蔵）を体感するうえで重要な役割の施設等来訪者数を指標として設定する。・ 目標値は、毎年3%増を設定する。・ 観光関連統計により把握する。 | | | | | |

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること

指標②－A：地域住民が日本遺産を誇りに思う割合（シビックプライド）

| 年度 | 実績 | | | 目標 | | |
|---------------------|--|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
| 数値 | 75.2% | 70.2% | 70.4% | 73.0% | 75.0% | 77.0% |
| 指標・目標値の設定の考え方及び把握方法 | <ul style="list-style-type: none">・ 地域住民の意識調査を実施することで、地域における日本遺産のストーリーが市民に浸透しているかを把握することができるため当指標を設定する。・ 目標値は、毎年2%増を設定する。・ 行田市総合振興計画意識調査において質問項目を設け、数値を把握する。 | | | | | |

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること

指標③－A：日本遺産を活用した花手水ライトアップイベント『希望の光』の経済効果

| 年度 | 実績 | | | 目標 | | |
|---------------------|---|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
| 数値 | — | 35,284 千円 | 92,577 千円 | 95,000 千円 | 98,000 千円 | 101,000 千円 |
| 指標・目標値の設定の考え方及び把握方法 | <ul style="list-style-type: none">・ ストーリーにおいて重要な位置付けである忍城や足袋蔵を活用したイベントであることから指標として設定した。・ 目標値は、毎年3%増を設定する。・ 観光関連統計により把握する。 | | | | | |

| 目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること | | | | | | |
|---------------------------------------|--|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 指標④－A：公開活用ができていない構成文化財の割合 | | | | | | |
| 年度 | 実績 | | | 目標 | | |
| | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
| 数値 | 20箇所／ 40箇所 | 20箇所／ 40箇所 | 20箇所／ 40箇所 | 21箇所／ 39箇所 | 22箇所／ 39箇所 | 23箇所／ 39箇所 |
| 指標・目標値の設定の 考え方及び把握方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 公開活用ができていない構成文化財の割合を確認することで、構成文化財の保存・活用状況を把握することに繋がるため当指標を設定する。 ・ 目標期間内外において、1年毎に新たに1箇所の公開・活用を実現する。 ・ 全構成文化財の状況把握により数値を管理する。 | | | | | |

| 目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること | | | | | | |
|-----------------------------|---|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 指標⑤－A：観光消費額 | | | | | | |
| 年度 | 実績 | | | 目標 | | |
| | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
| 数値 | 556,565 千円 | 1,535,543 千円 | 1,877,271 千円 | 1,934,000 千円 | 1,992,000 千円 | 2,051,000 千円 |
| 指標・目標値の設定の 考え方及び把握方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 観光消費額を捉えることが地域への波及効果を把握することにも繋がるため当指標を設定する。 ・ 目標値は、毎年3%増を設定する。 ・ 観光関連統計により把握する。 | | | | | |

(3) 地域活性化のための取組の概要

日本遺産に認定されて以来、市内小中学校への日本遺産巡回展示の実施等の普及・啓発活動により、小中学生の日本遺産の認知度は平成30年度の73%に対し、令和3年度には96%へと大幅に増加しており、確実に成果が表れている。そこで、これまでの取組みをブラッシュアップするとともに、足袋蔵等構成文化財の保存・活用を一層推進していくことで、日本遺産ストーリーを体感できる環境の充実を図る。本市の日本遺産の構成文化財であり、主要観光スポットでもある「埼玉古墳群」や「忍城」と、「行田足袋」とを結ぶモデルルートを作成し、三者の関連性と魅力を発信していく。具体的には、下記3つを柱とした取組みを推進する。

① 構成文化財の保存・活用の推進による日本遺産ストーリーを体感できる環境の整備

まずは、NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワークの主催による、20箇所以上の足袋蔵を公開し、足袋づくり見学や藍染体験等を実施する『ぎょうだ蔵めぐりまちあるき』等のイベントを継続的に開催することで、構成文化財のさらなる公開に向けた機運を醸成する。

そのうえで、構成文化財の保存と活用を強力に推進していくために、ふるさと納税の一部を財源として、足袋蔵等の歴史的建築物の保存・活用を図ろうとする所有者又は利活用者に対して、改修費の補助を行う「ふるさとづくり事業」(※1)を継続的に予算化する。

そして、教育委員会を中心に所有者と利活用者のマッチングを図り、構成文化財の保存・活用を一層推進することで、ストーリーを構成する文化財に思いを馳せながら、構成文化財を回遊する環境を充実させ、本市の日本遺産をより魅力的なものとしていく。なお、現在は非公開の構成文化財についても紹介動画等にリンクするQRコードの設置などを通じて、その魅力や歴史等のストーリーの発信を、日本の和装足袋文化の紹介も含めて多言語で図っていく。併せて、令和5年度は資金面で足袋産業を支えた「旧忍町信用組合店舗」の現利活用者との契約期間が満了することから、大正ロマンを身近に感じられる施設としてリニューアルオープンさせ、継続して活用を図る。また、令和6年度は足袋産業発展の象徴である「旧荒井八郎商店事務所兼主屋・大広間棟・洋館」の利活用を図り、昭和当時の雰囲気を感じられ、非日常を味わえる施設としてリニューアルオープンを実現する。

※1 ふるさとづくり事業：構成文化財等を改修し、利活用する場合に利活用者などに対して補助する
行田市独自の制度。補助率は2/3以内で、補助上限額は20,000千円である。

② 「埼玉古墳群」を核とした国内外への日本遺産ストーリーの発信及び経済効果創出

「埼玉古墳群」は令和2年に国の特別史跡に指定されており年間10万人以上が訪れる主要観光スポットである。令和5年4月にはさきたま古墳公園内において、地域DMOである(一社)行田おもてなし観光局(以下「観光局」とする。)が自ら資金調達をし、市と共同整備をした「観光物産館さきたまテラス」をオープンさせた。そこで、観光局とガイド団体連携のもと、観光物産館を発着地とし、埼玉古墳群と「行田足袋」との繋がりなどを解説する有料ガイドツアー(※2)を行う。なお、当ガイドツアーを観光物産館発着とすることで、そこでの消費促進や「足袋」や足袋工場に勤める人に愛され、100年フードにも認定された郷土料理「フライ・ゼリーフライ」等地場製品の振興にも繋げる。

また、令和5年度より観光局が指定管理者となったさきたま古墳公園内の「行田市はにわの館」においては、『はにわづくり体験』と先の有料ガイドツアーをパッケージ化し、教育旅行の誘致を図ることで、全国の小中学生に対して、本市の日本遺産ストーリーの周知

を図っていく。さらに、「行田市はにわの館」においては、新たに観光レンタサイクルの貸出しをスタートしたことから、ガイドツアー等で本市のストーリーに興味・関心を高めた来訪者を中心市街地「足袋蔵のまち」へと誘導し、ストーリーの理解を深めてもらう。

さらに、令和5年度からは新たに市と観光局の協働事業で、本市が中心となり東日本では初となる『御墳印による広域周遊促進事業』を6市1町連携のもとスタートした。今後本事業を他県にも拡大し御墳印ブームを創出することで、東日本最大級の古墳群である「埼玉古墳群」への来訪者を増加させ、各事業の効果を最大限発揮する。

※2 有料ガイド：本市には3つのガイド団体があるが、内2団体は無料ガイドであった。しかし、観光を産業化するための一環で、観光局主導の下、令和4年度より有料化を図った。

③ 「忍城」を核とした国内外への日本遺産ストーリーの発信及び経済効果創出

本市では、日本遺産のまち並みを高付加価値化することを主目的に、令和2年10月より「忍城」や忍城下の守り神として崇敬されてきた「行田八幡神社」、「足袋蔵」、商店など約100箇所、毎月2週間花手水を飾り、まちを彩る『行田花手水 week』をスタートした。また、『希望の光』と題し、毎月一夜、街中の花手水をライトアップする他、「忍城」と「行田八幡神社」では、城や社殿のライトアップ、和傘等による幻想的な演出を行っている。両イベントでは、中心市街地「足袋蔵のまち」における来訪者の回遊が図られており、解説板などを通じて日本遺産の構成文化財を学習できる仕組みとなっている。今後は両イベントを素材に、例えば「忍城おもてなし甲冑隊と巡る花手水と足袋蔵」のような着地型旅行商品を観光局により造成・販売し、ガイド等の解説によりストーリーと構成文化財を学習できる機会を提供していく。回遊するルート中には「観光物産館ぶらっと♪ぎょうだ」を設定し、足袋等地場産品振興にも繋げる。併せて、市内足袋事業者が参画する「行田足袋」振興会が中心となり、ヨガ足袋やサムライ足袋のような事業者の技術を活かした新商品開発も行い、観光物産館の魅力向上や足袋産業の振興も図る。また、日本遺産と花手水は和装との親和性が高いため、観光局と市内呉服店との連携により『着物で街歩き体験』を推進し、和装という切り口から来訪者の「行田足袋」への関心を高め、足袋作り体験や足袋作り工程を学ぶことができる「足袋とくらしの博物館」等への送客を図る。

さらに、本市におけるインバウンド誘客の足掛かりとするため、令和5年度は観光庁のインバウンドの地方誘客や消費拡大に向けた観光コンテンツ造成支援事業を活用し、『日本遺産「忍城下町」花手水タウンプロジェクト』を実施する。当事業では、両イベント開催期間中に、『花手水グルメイベント（※3）』、『花夜散歩（※4）』、『忍城花手水夜燈（※5）』等を行う。また、本市は令和5年度より埼玉県インバウンド分野における重点地域となったことから、県及び地域連携DMOである（一社）埼玉県物産観光協会とも連携を密にし、県主催による都内発着の日帰りツアーを企画する国内旅行会社やランドオペレーター等との商談会、旅行博等に参加し、インバウンド事業者との関係性構築に努めていく。

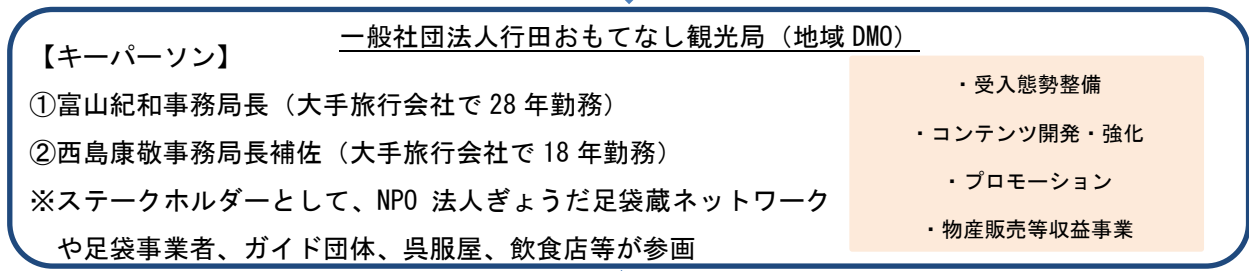
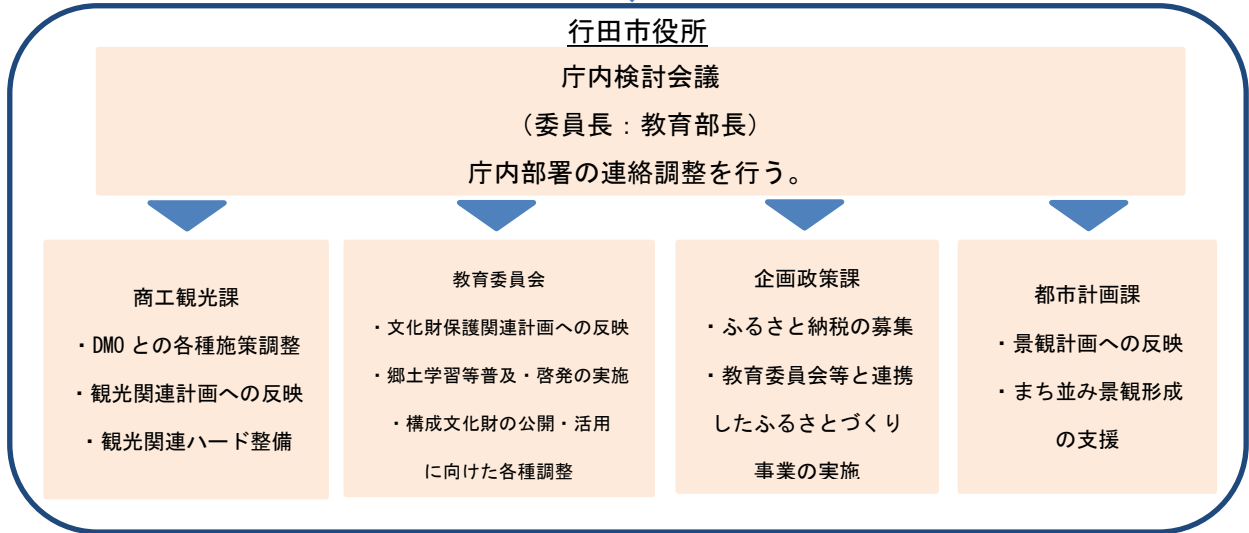
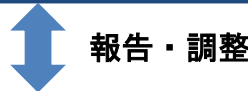
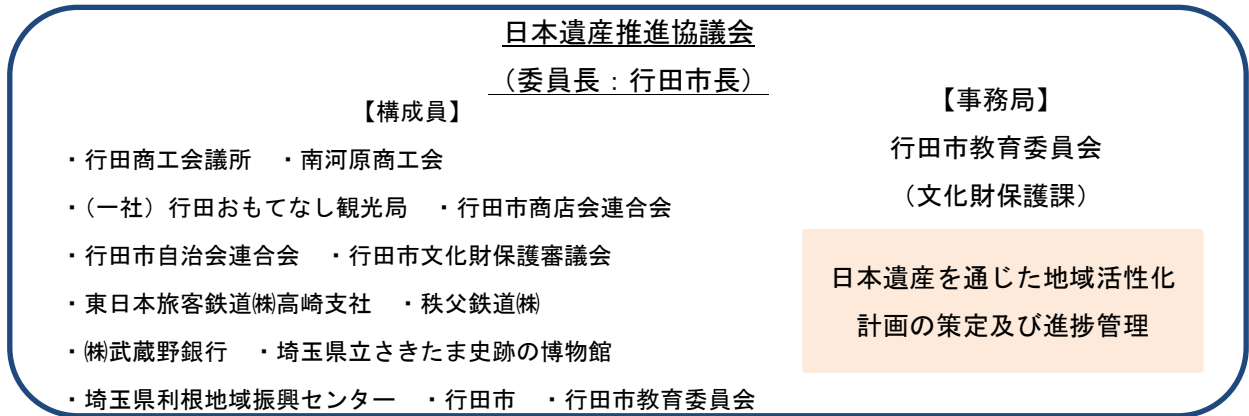
また、行田市郷土博物館では、忍城や足袋産業の歴史に関する資料を収集・保存し、展示や講座などを通して日本遺産のストーリーへの理解を深めてもらうとともに、足袋蔵や埼玉古墳群へ回遊させるための情報発信を行うなど文化観光の拠点としての役割を担う。

※3 花手水グルメイベント：フライ・ゼリーフライや地酒等のフードイベント

※4 はなよさんぽ 花夜散歩：花手水提灯を貸出し、夜の「日本遺産のまち」回遊に繋げる

※5 おしじょうはなちようずよるあかり 忍城花手水夜燈：忍城を背景とした光と音のアート

(4) 実施体制



[人材育成・確保の方針]

- ・ ストーリーテラーを担うガイド人材については、(一社) 行田おもてなし観光局が文化財関連部局・専門家・アドバイザーからの伴走支援を受け、文化観光を展開するための知識と、ガイディング技術や安全管理の研修等を継続実施する。
- ・ インバウンド人材については、(一社) 行田おもてなし観光局が言語に長けた人材を中期的には獲得し、専門家・アドバイザーからの伴走支援を受け、育成を図る。
- ・ 将来の担い手については、市と市内教育機関が連携し、郷土学習等を継続実施する。

(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

本市の日本遺産を通じた地域活性化の推進は、様々なステークホルダーにより構成される日本遺産推進協議会において、地域活性化計画の合意形成を図り、計画に基づき市と（一社）行田おもてなし観光局が明確な役割分担のもとそれぞれ実施していく体制である。

市における予算を要する取組としては、観光関連や景観関連のハード面の整備、構成文化財の公開・活用、そして、それを支援する「ふるさとづくり事業」をはじめとする支援制度がある。こうした事業を安定的・継続的に実施していくため、引き続き「行田市総合振興計画」や「行田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」等、上位計画にこれらを明確に位置付けていく。

（一社）行田おもてなし観光局においては、「受入態勢整備」や「コンテンツ開発・強化事業」、「プロモーション事業」を公益事業と収益事業のそれぞれにおいて実施し、日本遺産を通じた地域活性化を図る。公益事業については、収益性は低い地域への集客等を図るうえで必要なものであることから、財源については市から委託的観点において補助を行う。そのため、引き続き市の上位計画にこれを明確に位置付けることで、安定性・継続性を確保していく。一方、収益事業については、忍城・足袋蔵エリアに位置する「ぶらっと♪ぎょうだ」及び埼玉古墳群エリアに位置する「さきたまテラス」の2つの観光物産館において営業利益を着実に確保することで安定的・継続的に実施する。また、着地型旅行事業やレンタサイクル事業等多角的な事業展開をすることで、法人の財務基盤安定にも繋げる。なお、収益事業において得た営業利益については、レンタサイクルの車両入替や観光物産館の什器入替等に積極投資していくことで、施設などの魅力をより一層向上させ、集客や売上を向上する、という好循環に繋げる。

以上のようにして、日本遺産を通じた地域活性化を中長期的に図り、（1）将来像（ビジョン）を実現していく。

(6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク主催による、足袋づくり体験や藍染体験、20 箇所以上の足袋蔵を公開する『ぎょうだ蔵めぐりまちあるき』等のイベントを継続的に開催することで、構成文化財のさらなる公開に向けた機運を醸成していく。

また、「まち並み景観整備事業」として、商店や民家等の所有者が建物を日本遺産のまち行田にふさわしい外観に改修する場合に、所有者等に対して改修費の一部補助を行うことで、まち並みの高付加価値化を図る。

構成文化財の保存と活用を強力に推進する仕組みとしては、ふるさと納税の使途として「足袋蔵等歴史的建築物改修・活用事業等への活用」を用意している。当使途を指定した寄附を受け付けた場合は、足袋蔵をはじめとした歴史的建築物の保存・活用を図ろうとする所有者又は利活用者に対して、改修費の補助を行う「ふるさとづくり事業」(*)の財源となる「ふるさとづくり基金」に積み立てている。ふるさと納税を財源とする「ふるさとづくり事業」を継続的に予算化するとともに、足袋蔵の所有者と民間事業者等の利活用希望者のマッチングを図り、構成文化財の保存・活用をより一層推進することで、構成文化財を回遊する環境の充実を図り、本市の日本遺産を一層魅力的なものとしていく。

また、『行田花手水 week』及び『希望の光』をはじめとした日本遺産の観光事業化を通じて、域外からの来訪者を増やすことは、地域における商業価値が向上することにも繋がるため、足袋蔵等歴史的建築物を活用して新たな事業を実施しようとする活用者が現れる可能性が増すものであり、好循環の形成に繋げていく。

※ ふるさとづくり事業：構成文化財等を改修し、利活用する場合に利活用者などに対して補助する行田市独自の制度。補助率は 2/3 以内で、補助上限額は 20,000 千円である。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

| | | | |
|------------|---|---|--------------------|
| 事業名 | 計画に基づく事業の企画・実施を行う組織の連携体制整備 | | |
| 概要 | 計画に基づく事業の企画・実施を担う市と（一社）行田おもてなし観光局（地域 DMO）間の連携体制を整備する。 | | |
| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
| ① | 役割の明確化 | 市の関係部署間及び市と（一社）行田おもてなし観光局間における役割を明確化し、効果的・効率的に各種事業を実施できる体制を確立する。 | 行田市、（一社）行田おもてなし観光局 |
| ② | 財源の明確化 | 市と（一社）行田おもてなし観光局がそれぞれ実施する事業の財源を明確化し、各財源の確保に努める。 | 行田市、（一社）行田おもてなし観光局 |
| ③ | 定例連絡会議の設置 | 市の関係部署間及び市と（一社）行田おもてなし観光局間においてそれぞれ実施する事業の進捗や課題等を共有する場を設置する。 | 行田市、（一社）行田おもてなし観光局 |
| ④ | 日本遺産推進協議会への成果等報告 | 市と（一社）行田おもてなし観光局においてそれぞれ実施した事業の成果等を地域の様々なステークホルダーが参画する日本遺産推進協議会に報告する。 | 行田市、（一社）行田おもてなし観光局 |
| 年度 | 事業評価指標 | | 実績値・目標値 |
| 2020 | | | — |
| 2021 | | | — |
| 2022 | | | — |
| 2023 | 明確な役割分担に基づき市又は（一社）行田おもてなし観光局が実施した事業数 | | 15 |
| 2024 | 明確な役割分担に基づき市又は（一社）行田おもてなし観光局が実施した事業数 | | 15 |
| 2025 | 明確な役割分担に基づき市又は（一社）行田おもてなし観光局が実施した事業数 | | 15 |
| 事業費 | 2023 年度：— 2024 年度：— 2025 年度：— | | |
| 継続に向けた事業設計 | 日本遺産推進協議会、市及び（一社）行田おもてなし観光局における役割を明確化し、報告・連絡体制を確立することで、PDCA サイクルを円滑にまわしていく。 | | |

(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

| | | | |
|------------|---|--|-----------------|
| 事業名 | 他の行政計画及び地域 DM0 の戦略への位置付け | | |
| 概要 | 他の行政計画及び地域 DM0 の戦略において、「日本遺産」の位置付けや他の施策との関係性を明確化する。 | | |
| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
| ① | 文化財保存活用地域計画への位置付け | 文化財保存活用地域計画において、「日本遺産」の位置付けを明確化する。 | 行田市 |
| ② | 景観計画への位置付け | 景観計画において、「日本遺産」の位置付けを明確化する。 | 行田市 |
| ③ | アンケート調査の実施 | 令和6年度からの5年間を戦略期間とした誘客戦略を策定するにあたり、観光案内所等においてアンケート調査を実施する。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |
| ④ | 誘客戦略への位置付け | 令和6年度からの5年間を戦略期間とした誘客戦略において、「日本遺産」の位置付けや他の施策との関係性を明確化する。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |
| 年度 | 事業評価指標 | | 実績値・目標値 |
| 2020 | 日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び地域 DM0 の戦略の数 | | 1 |
| 2021 | | | 2 |
| 2022 | | | 2 |
| 2023 | 日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び地域 DM0 の戦略の数 | | 2 |
| 2024 | 日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び地域 DM0 の戦略の数 | | 4 |
| 2025 | 日本遺産との関係性を明確化した行政計画及び地域 DM0 の戦略の数 | | 5 |
| 事業費 | 2023 年度 : ①1,926 千円、②7,000 千円 2024 年度 (見込み) : ①1,281 千円、②7,000 千円 2025 年度 : - | | |
| 継続に向けた事業設計 | 行政計画及び地域 DM0 の戦略において、日本遺産の位置付けや他施策との関係性を明確化することで、日本遺産を通じた地域活性化が中長期的に継続されることが担保される。 | | |

(7) - 3 人材育成

(事業番号 3 - A)

| | | | |
|------------|---|--|----------------|
| 事業名 | 日本遺産を活用する人材の育成 | | |
| 概要 | 日本遺産のストーリー等を現地で発信するガイドや観光案内スタッフの育成を図る。 | | |
| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
| ① | 日本遺産のストーリー等を現地で発信するガイドの研修 | 日本遺産をテーマとするガイドツアーにおいて、ストーリーや構成文化財の魅力を発信できるようガイドの研修を行う。 | (一社)行田おもてなし観光局 |
| ② | 日本遺産のストーリー等を現地で発信する観光案内スタッフの研修 | 日本遺産のストーリーや構成文化財の魅力を観光客に対して発信できるよう観光案内所及び観光物産館のスタッフの研修を行う。 | (一社)行田おもてなし観光局 |
| ③ | 日本遺産を活用した事業等のためのシンポジウムの開催 | 日本遺産を活用した事業等の企画立案などに繋げるため事業者や市民向けにシンポジウムを開催する。 | 行田市 |
| 年度 | 事業評価指標 | | 実績値・目標値 |
| 2020 | | | — |
| 2021 | | | — |
| 2022 | | | — |
| 2023 | 研修等参加者延べ人数 | | 50名 |
| 2024 | 研修等参加者延べ人数 | | 50名 |
| 2025 | 研修等参加者延べ人数 | | 50名 |
| 事業費 | 2023年度：①②200千円、③60千円 2024年度（見込み）：①②200千円 2025年度（見込み）：①②200千円 | | |
| 継続に向けた事業設計 | ①②は日本遺産のストーリーや構成文化財の魅力等を発信する担い手の育成を図るものであり、公益性が高いことから、行田市からの補助を受けて継続的に実施する。 | | |

(7) - 4 整備

(事業番号4-A)

| 事業名 | 日本遺産に関連する歴史的建造物等の整備 | | |
|-----|--|--|------|
| 概要 | <p>NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク主催のもと、普段は非公開の20箇所以上の足袋蔵を限定公開するとともに、各構成文化財で足袋づくり体験や藍染体験等を実施する『ぎょうだ蔵めぐりまちあるき』等のイベントを継続的に開催することで、構成文化財のさらなる公開に向けた機運を醸成していく。</p> <p>そのうえで、日本遺産に関連する歴史的建造物等の利活用を進め、来訪者が行田足袋と足袋蔵のストーリーを体感できる街を形成する。なお、現在非公開の構成文化財についても紹介動画等へとリンクするQRコードの設置などを通じて、その魅力や歴史等のストーリーの発信を、日本の和装足袋文化の紹介も含めて、多言語で図る。</p> | | |
| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
| ① | 旧荒井八郎商店事務所兼主屋・大広間棟・洋館の取得及び利活用 | 旧荒井八郎商店事務所兼主屋・大広間棟・洋館の所有者から取り壊したい旨の相談を受け、文化財保存の考えのもと協議し、市が取得することとなった。今後、整備を実施したうえで民間事業者等に貸付け、昭和当時の雰囲気を感じられる非日常を味わえる施設としてリニューアルオープンさせる。 | 行田市 |
| ② | 旧忍町信用組合店舗の利活用 | 令和5年9月をもって現利活用者との契約期間が満了する。そこで、大正ロマンを身近に感じられる施設としてリニューアルオープンさせ、継続して活用を図る。 | 行田市 |
| ③ | 日本遺産に関連する歴史的建造物の整備 | ふるさと納税を財源に、日本遺産構成文化財等を改修し、その建築物を利活用する場合に所有者又は利活用者に対して補助する制度（補助率2/3以内、補助上限額20,000千円）を継続的に予算化したうえで、行田市教育委員会を中心に所有者と利活用者のマッチングを図り、公開活用を積極的に進める。 | 行田市 |
| ④ | 日本遺産と調和した景観の整備 | 「まち並み景観整備事業」として、商店や民家等の所有者が建物を行田らしい外観に改修する場合に、改修費の一部補助を行う。 | 行田市 |
| ⑤ | 構成文化財へのQRコード設置 | 非公開の構成文化財の内部紹介動画等を制作し、QRコードにリンクさせて、日本遺産を体感できるよう整備する。併せて、説明に日本の和装足袋文化の解説も加え、多言語化していく。 | 行田市 |

| 年度 | 事業評価指標 | 実績値・目標値 |
|------------|---|-----------|
| 2020 | 公開活用ができていない構成文化財の割合 | 20箇所／40箇所 |
| 2021 | | 20箇所／40箇所 |
| 2022 | | 20箇所／40箇所 |
| 2023 | 公開活用ができていない構成文化財の割合 | 21箇所／39箇所 |
| 2024 | 公開活用ができていない構成文化財の割合 | 22箇所／39箇所 |
| 2025 | 公開活用ができていない構成文化財の割合 | 23箇所／39箇所 |
| 事業費 | 2023年度：①119,455千円、③3,600千円（案件が生じた場合に、不足する分は補正予算措置）、④2,000千円、⑤1,661千円 2024年度（見込み）：③3,600千円（案件が生じた場合に、不足する分は補正予算措置）、④2,000千円 2025年度（見込み）：③3,600千円（案件が生じた場合に、不足する場合は補正予算措置）、④2,000千円 | |
| 継続に向けた事業設計 | 行政計画において、日本遺産の位置付けや各取組を明確化することで、継続的に事業を実施していく。 | |

(事業番号4-B)

| 事業名 | 日本遺産に関連する史跡等の整備 | | |
|------------|--|---|-------------|
| 概要 | 構成文化財である「埼玉古墳群」、「忍城跡」等の整備を推進するとともに、それらを適正に管理・公開して日本遺産のストーリーなどを発信する。 | | |
| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
| ① | 埼玉古墳群の整備・ストーリー等発信 | 国指定特別史跡「埼玉古墳群」、「さきたま古墳公園」、「県立さきたま史跡の博物館」、公園へのアクセス道路等の整備・管理・公開を推進する。 | 埼玉県 |
| ② | 忍城跡の整備・ストーリー等発信 | 県指定旧跡「忍城跡」、「忍城址公園」、「行田市郷土博物館」の整備・管理・公開を推進する。 | 行田市 |
| ③ | 石田堤の管理・公開 | 地元住民で組織されている石田堤を守る会と連携して、県指定史跡「石田堤」の管理・公開を推進する。 | 行田市、石田堤を守る会 |
| 年度 | 事業評価指標 | | 実績値・目標値 |
| 2020 | 忍城・足袋蔵エリア及び埼玉古墳群エリア来訪者数 | | 153,529人 |
| 2021 | | | 532,615人 |
| 2022 | | | 555,173人 |
| 2023 | 忍城・足袋蔵エリア及び埼玉古墳群エリア来訪者数 | | 572,000人 |
| 2024 | 忍城・足袋蔵エリア及び埼玉古墳群エリア来訪者数 | | 589,000人 |
| 2025 | 忍城・足袋蔵エリア及び埼玉古墳群エリア来訪者数 | | 607,000人 |
| 事業費 | 2023年度：①287,289千円、②40,028千円、③137千円 2024年度（見込み）：①261,000千円、②40,028千円、③137千円 2025年度（見込み）：①261,000千円、②40,028千円、③137千円 | | |
| 継続に向けた事業設計 | 埼玉古墳群については、長期的な計画に基づいて整備が進められることとなっている。忍城跡、石田堤については、行政計画において日本遺産の位置付けや各取組を明確化することで、継続的に事業を実施していく。 | | |

(7) - 5 観光事業化

(事業番号5-A)

| | |
|-----|--|
| 事業名 | 「埼玉古墳群」を核とした日本遺産ストーリーの発信及び経済効果創出 |
| 概要 | 地域内外の人々に日本遺産ストーリーを体感してもらう事業により経済効果を生み出すためガイドツアー、教育旅行誘致等を図る。また、来訪を経済に結ぶ拠点として「観光物産館さきたまテラス」を位置付けるとともに、観光レンタサイクルを活用して、忍城・足袋蔵エリアへのネットワーク強化を図る。 |

| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
|---|-----------------------------|---|-----------------------|
| ① | 有料ガイドツアーの実施 | 「観光物産館さきたまテラス」を発着地とし、日本遺産のストーリー等を解説する有料ガイドツアーを実施する。 | (一社) 行田おもてなし観光局、ガイド団体 |
| ② | 教育旅行の誘致 | ガイドツアーと「行田市はにわの館」における『はにわづくり体験』をパッケージ化し、県内外の小中学校を中心とした教育旅行を誘致する。 | (一社) 行田おもてなし観光局、ガイド団体 |
| ③ | 観光レンタサイクルを活用した忍城・足袋蔵エリアへの誘導 | 「行田市はにわの館」において観光レンタサイクルを貸出し、ストーリーに関心を高めた来訪者を忍城・足袋蔵エリアへと誘導する。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |
| ④ | 御墳印による広域周遊促進 | 本市が中心となり御朱印の古墳版となる『御墳印』を6市1町連携のもと販売し、御墳印ブームを創出することで「埼玉古墳群」への来訪者を増加させ、併せて日本遺産ストーリーにも触れていただく。 | 行田市、(一社) 行田おもてなし観光局 |
| ⑤ | 消費の拠点としての「観光物産館さきたまテラス」の運営 | 足袋や足袋関連商品、古墳関連商品等の充実を図り、日本遺産を通じた消費促進を図る。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |

| 年度 | 事業評価指標 | 実績値・目標値 |
|------|--------------|-----------|
| 2020 | 埼玉古墳群エリア来訪者数 | 72,176 人 |
| 2021 | | 92,774 人 |
| 2022 | | 110,331 人 |
| 2023 | 埼玉古墳群エリア来訪者数 | 114,000 人 |
| 2024 | 埼玉古墳群エリア来訪者数 | 117,000 人 |
| 2025 | 埼玉古墳群エリア来訪者数 | 121,000 人 |

| | |
|-----|---|
| 事業費 | 2023 年度 : ②3,220 千円、③50 千円、④2,105 千円、⑤15,378 千円 2024 年度(見込み) : ②3,200 千円、③50 千円、④1,610 千円、⑤15,510 千円 2025 年度(見込み) : ②3,200 千円、③50 千円、④1,610 千円、⑤15,642 千円 |
|-----|---|

| | |
|------------|--|
| 継続に向けた事業設計 | ②については、公益事業として行田市からの補助を受けて継続的に実施する。①③④⑤については、収益事業として各事業の収益で継続する。 |
|------------|--|

(事業番号5-B)

| 事業名 | 「忍城」を核とした日本遺産ストーリーの発信及び経済効果創出 | | |
|------------|--|--|-------------------------|
| 概要 | 地域内外の人々に日本遺産のストーリーを体感してもらう事業により経済効果の創出やエリア内の回遊を促進するため、日本遺産を活用したイベント、着地型旅行商品の造成等を図る。また、来訪を経済に結ぶ拠点として「観光物産館ぶらっと♪ぎょうだ」を位置付ける。 | | |
| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
| ① | ぎょうだ蔵めぐりまちあるき | 足袋蔵の利活用促進や日本遺産のストーリーを体感してもらうため、現在は非公開の足袋蔵で、着物での参加者に特典を付ける足袋蔵スタンプラリーや足袋づくり体験、藍染体験、ハンドメイド作品の展示・販売等を実施する。 | NPO 法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク |
| ② | 日本遺産を活用した『行田花手水 week』及び『希望の光』の実施 | 街中の回遊を通じて構成文化財を学習できる『行田花手水 week』及び『希望の光』を毎月開催する。なお、令和5年度は、観光庁のインバウンドの地方誘客や消費拡大に向けた観光コンテンツ造成支援事業を活用し、『日本遺産「忍城下町」花手水タウンプロジェクト』も実施する。 | ・行田市 ・(一社)行田おもてなし観光局 |
| ③ | 着地型旅行商品の造成・販売 | 忍城おもてなし甲冑隊やガイドのストーリー解説付きで花手水がある日本遺産の街を巡る旅行商品を造成・販売する。なお、着物や足袋づくり体験等と組み合わせ高付加価値化を図る。 | (一社)行田おもてなし観光局 |
| ④ | 構成文化財を巡るデジタルスタンプラリーの実施 | スタンプ数で日本遺産カードがもらえる構成文化財を巡るデジタルスタンプラリーを実施。 | (一社)行田おもてなし観光局 |
| ⑤ | 消費の拠点としての「観光物産館ぶらっと♪ぎょうだ」の運営 | 足袋や足袋関連商品等の充実を図り、日本遺産を通じた消費促進を図る。 | (一社)行田おもてなし観光局 |
| 年度 | 事業評価指標 | | 実績値・目標値 |
| 2020 | | | 81,353人 |
| 2021 | 忍城・足袋蔵エリア来訪者数 | | 439,841人 |
| 2022 | | | 444,842人 |
| 2023 | 忍城・足袋蔵エリア来訪者数 | | 458,000人 |
| 2024 | 忍城・足袋蔵エリア来訪者数 | | 472,000人 |
| 2025 | 忍城・足袋蔵エリア来訪者数 | | 486,000人 |
| 事業費 | 2023年度：①300千円、②18,515千円、③1,490千円、④974千円、⑤7,000千円 2024年度(見込み)：①300千円、②2,300千円、⑤7,000千円 2025年度(見込み)：①300千円、②2,300千円、⑤7,000千円 | | |
| 継続に向けた事業設計 | ②④については、公益事業として行田市からの補助を受けて実施する。 ①③⑤については、収益事業として各事業の収益で継続する。 | | |

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-A)

| 事業名 | 地域住民への普及啓発 | | |
|------------|--|--|---|
| 概要 | 市内小中学校の児童・生徒及び地域住民が日本遺産のストーリーを理解し誇りに思えるよう継続的な普及啓発を実施する。 | | |
| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
| ① | 市内小中高等学校における郷土学習の推進 | 市内小中学校を対象に、マイ足袋づくりや日本遺産巡回展示、社会科等の授業を通じた足袋の学習を行う。また、市内高等学校で「行田學」の授業を行い、日本遺産をはじめとする地域の歴史・文化の学習を行う。 | ・行田市 ・県立進修館高校 ・足袋事業者 ・NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク |
| ② | 郷土博物館における足袋検定の実施 | 郷土博物館の来館者等を対象に、行田足袋や足袋産業の歴史などについての知識検定を実施する。 | 行田市 |
| ③ | 日本遺産に関する講座の開催・郷土博物館所蔵の構成文化財を活用した普及啓発 | 日本遺産に関する市民向けの講座や郷土博物館が所蔵する構成文化財を題材に講座等を開催する。 | 行田市 |
| ④ | 学校給食におけるゼリーフライの提供 | 学校給食において、ゼリーフライを出すことで、日本遺産に関連する食文化を学ぶ機会を提供する。 | 行田市 |
| ⑤ | 市内小中学校での綿花栽培 | なぜ足袋の産地として広く知れ渡りようになったのか地理的・気候的要因を学んでもらうため、市内小中学校で綿花栽培体験を行う | 行田市 |
| 年度 | 事業評価指標 | | 実績値・目標値 |
| 2020 | 地域住民が日本遺産を誇りに思う割合 | | 75.2% |
| 2021 | | | 70.2% |
| 2022 | | | 70.4% |
| 2023 | 地域住民が日本遺産を誇りに思う割合 | | 73.0% |
| 2024 | 地域住民が日本遺産を誇りに思う割合 | | 75.0% |
| 2025 | 地域住民が日本遺産を誇りに思う割合 | | 77.0% |
| 事業費 | 2023年度：①20千円、②50千円、③1千円、④500千円、⑤50千円 2024年度（見込み）：①20千円、②150千円、③1千円、④500千円、⑤50千円 2025年度（見込み）：①20千円、②150千円、③1千円、④500千円、⑤50千円 | | |
| 継続に向けた事業設計 | 行政計画において、日本遺産の位置付けや各取組を明確化することで、継続的に事業を実施していく。 | | |

(7) - 7 情報編集・発信

(事業番号7-A)

| | |
|-----|---|
| 事業名 | 国内外へのプロモーション |
| 概要 | 日本遺産のストーリーに関する情報等を多言語公式観光サイトなどで観光客目線に立ってプロモーションを図る。また、現地旅行会社等を集めた説明会の開催や県主催の国内のランドオペレーター等を集めた商談会などに参加し、インバウンド事業者との関係性を構築し、集客に繋げる。 |

| | 取組名 | 取組内容 | 実施主体 |
|---|--------------|--|-----------------|
| ① | 国内向け旅マエの情報発信 | ストーリー等日本遺産関連情報を市公式 HP や観光公式 HP、SNS、広告掲載などにより観光客目線で情報発信を行う。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |
| ② | 国内向け旅ナカの情報発信 | ストーリー等日本遺産関連情報を掲載した観光パンフレットなどを作成し、構成文化財の周遊促進に繋げる。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |
| ③ | 国外向け旅マエの情報発信 | ストーリー等日本遺産関連情報を掲載している多言語観光公式サイトの充実を図り、観光客目線で情報発信を行う。また、現地旅行会社向け説明会の開催等を行う。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |
| ④ | 国外向け旅ナカの情報発信 | 都内発着バスツアーを実施している旅行会社やランドオペレーター等を集めた県主催商談会や旅行博などに参加する。また、多言語パンフレット等を作成し、構成文化財の周遊促進に繋げる。 | (一社) 行田おもてなし観光局 |

| 年度 | 事業評価指標 | 実績値・目標値 |
|------|-----------------------------------|---------------|
| 2020 | 観光公式サイト「行田市観光 NAVI」の閲覧数 ※多言語含む | 976,246view |
| 2021 | | 1,653,327view |
| 2022 | | 1,601,958view |
| 2023 | 観光公式サイト「行田市観光 NAVI」の閲覧数 ※多言語含む | 1,650,000view |
| 2024 | 観光公式サイト「行田市観光 NAVI」の閲覧数 ※多言語含む | 1,700,000view |
| 2025 | 観光公式サイト「行田市観光 NAVI」の閲覧数 ※多言語含む | 1,750,000view |

| | |
|-----|--|
| 事業費 | 2023 年度 : ①②2,300 千円、③6,138 千円、④468 千円 2024 年度 (見込み) : ①②2,300 千円、③④10,000 千円 2025 年度 : (見込み) : ①②2,300 千円、③④10,000 千円 |
|-----|--|

| | |
|------------|------------------------------|
| 継続に向けた事業設計 | 公益事業として行田市からの補助を受けて継続的に実施する。 |
|------------|------------------------------|